

地域資産としての名古屋市演劇練習館（旧稲葉地配水塔）に関する研究*

Study on Old Inabachi Watertower in Nagoya as Regional Heritage *

田中 良英**・岡田 昌彰***

By Yoshihide TANAKA**・Masaaki OKADA***

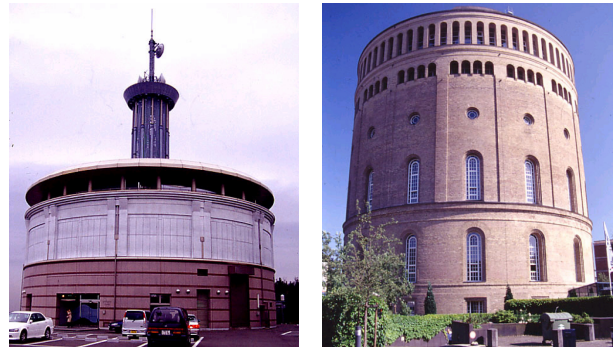
1. 研究の背景と目的

近年、既存建築に新用途を付与する「リノベーション」の手法が建築界を中心に台頭している。経済性^{補注(1)}をはじめ文化財保護、既存ハードの有効活用など、さまざまな観点からリノベーションの価値が見出されているが、ひいてはインフラにおける「スクラップ&ビルド」から「ストック」への価値転換を反映する動きと捉えることもできる。

一方、用途転用された結果生起する特徴的な景観や空間に関しては、創作の発想を助長する点が指摘されているものの^{補注(2)}、その特質に関して十全たる分析的研究は行われているとは言えない。所与の用途が人の居住・活動する“建築”という用途と明確な関連をもたない土木構造物や産業施設においては、新用途付与による創出景観・空間の特徴が特に顕著となる。この側面においても、地域資産・文化財としてのハード保存において留意すべきことは多いと考えられる。

本研究では、配水塔という本来の用途から建築物（演劇練習館）に用途転用された代表的事例である名古屋市演劇練習館を対象とし、その転用の経緯とともに評価現況を調査分析することで、用途転用された土木空間に対する想起イメージを居住特性に着目し把握することを目的とする。

リノベーションに関しては、創造される空間の多義性に関する研究³⁾のほか、住宅建築における基本理念を総括したもの⁴⁾からデザイン手法⁵⁾、デザイン批評⁶⁾に至るまで様々な観点から議論がなされている。さらに家倉ら⁷⁾の研究ではその空間的特質についても言及されているが、研究対象を土木構造物にまで拡張した議論は未だ展開されていない。



図ー1 給水塔のリノベーション事例（筆者撮影）
左）レストランへの転用：（レストランペラヴィスタ：横須賀市）
右）ホテルへの転用（Hotel Wasserturm：ドイツKöln市）



図ー2 現在の名古屋市演劇練習館（筆者撮影）

2. 土木構造物のリノベーション現況

近年、給水塔などの土木構造物や産業施設などを他用途に再利用する試みが内外において行われている。給水塔をレストランやホテルに改修するもの（図ー1）や、排水路や桁下空間などをアートイベント空間として展開するものも見られ、いずれも特徴的な空間の創出に成功しているといえる。新用途はギャラリーやレストラン、ホテルなど多岐に渡っている。

3. 名古屋市演劇練習館（旧稲葉地配水塔）の系譜

（1）図書館及び演劇練習館への転用

名古屋市中村区に位置する稲葉地配水塔（図ー2・3）は、名古屋市西部地区の上水道供給を目的として1937年に竣工した。高さ30mのRC造構造物であり、直径33mに及ぶ円筒形水槽の外周に高さ20m、直径1.5mの円柱16本が施されている。当初、水槽は590m³で設計されたが、

*キーワード：リノベーション、配水塔、イメージ

**工学士，日本エスリード株式会社

（大阪市北区梅田1-1-3-2400 大阪駅前第3ビル24F，
TEL 06-6345-1880，FAX 06-6345-1770）

***正員，博士（工学）

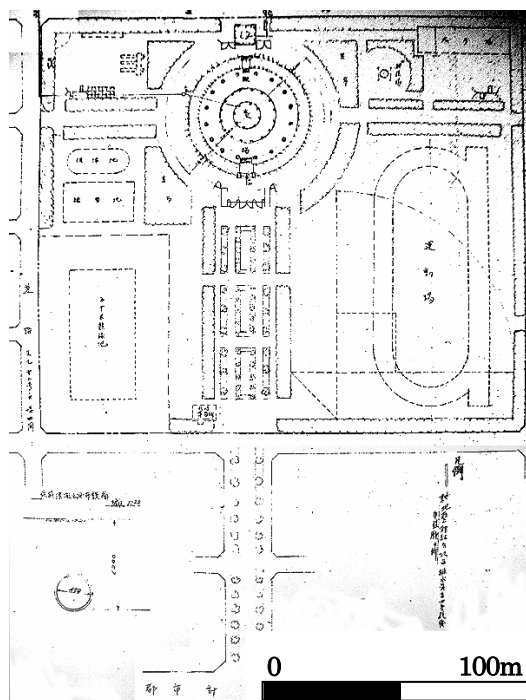
近畿大学准教授 理工学部社会環境工学科
（東大阪市小若江3-4-1
TEL06-6721-2332，FAX06-6730-1320）



図－3 名古屋市演劇練習館の位置



図－4 1937年竣工当時の稲葉地配水塔
(名古屋市演劇練習館 蔵)



図－5 1937年竣工当時の設計図面
(名古屋市演劇練習館 蔵)

周辺の道路と配水塔敷地内のアプローチ軸線が揃えられており、各道路のアイストップとして機能していたことがわかる。

急激な人口増加による水需要の拡大が予測され、後に水槽容量が当初の約7倍の4,000m³に設計変更されている。これにより、当初設計よりも規模の大きくなった水槽部に16本の補強柱を施すこととなったが、これが後に“古代ギリシャの円形神殿を思わせる”外観となった(図－4)。また、配水塔の周辺は図－5のように道路と一体的な空間処理がなされ、配水塔をアイストップとした軸線が敷地外の道路軸に揃えられるなど、その外観を活用した景観整備が意図されていたものと考えられる^{補注(3)}。

後の1944年には近隣に新鋭の大治浄水場が完成し、ポンプ圧送による水供給が可能となったため、稲葉地配水塔は僅か7年で廃止される。その後20年間、名目上は名古屋市水道局の倉庫であったが、半ば廃屋同然の状態で放置されていた。

廃止から21年後の1965年、杉戸清・名古屋市長の「一区一図書館政策」に伴い、配水塔の外観保存を基本方針として旧配水塔が中村区の図書館として再利用されることとなる(図－6)。当初は建物の珍しさもあり連日多くの市民が訪れたほか、図書館周辺も「稲葉地公園」として整備された。1989年には名古屋市都市景観重要建造物に指定されている。

その後図書館としての使用性が問題視され始め、1991年には付近に新設された文化施設に図書館機能が移転する。ふたたび空家となった旧配水塔は1992年、現在の演劇練習館として再度転用されるに至っている。内部は地上5階＋地下1階となっており、最上部には舞台照明や音響設備などをもつリハーサル室1室(376m²)、その下層部に扇形の大練習室5室(各93m²)、小練習室3室(各63m²)、和室1室(51m²)、研修室1室(64m²)が補強壁によって区切られ施されている。2002年度には演劇185団体、舞踊134団体、音楽135団体の練習場として利用されており、練習室の稼働率は99%を超えているほか、演劇団体のレベルアップを図るワークショップなども開催されている⁹⁾。

パルテノン神殿を想起させる外観と「水(アクア)」を重ね合わせた公募愛称「アクテノン」が施され、



図－6 中村図書館に転用された稲葉地配水塔
(名古屋市演劇練習館 蔵)

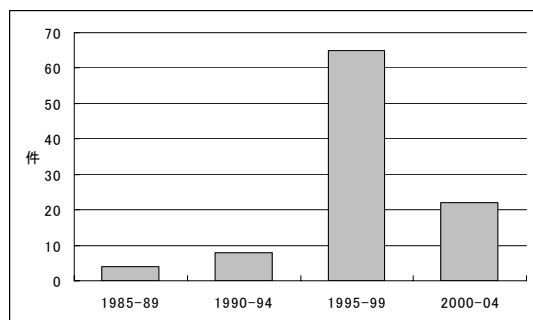


図-7 旧配水塔の掲載記事数の変遷

表-1 調査概要

	施設利用者	施設非利用者
調査日時	2004年11月3日 ～12月20日	2004年11月3日、7日 13時～17時
調査対象地	演劇練習館内	演劇練習館周辺域 (館前広場、稲葉地公園)
調査方法	留置き調査	ヒアリング
サンプル数	96	33

<調査項目>

1. 年齢
2. 居住地最寄駅
3. 訪問目的
4. 訪問頻度/月
5. 演劇練習館のイメージ (自由想起)

表-2 データ例

年齢	居住地最寄駅	訪問目的	訪問頻度	イメージ
20代	中村日赤	施設利用	3	白い巨塔
20代	豊橋	施設利用	4	隠れた練習SPOT
20代	工前津	施設利用	4	芝居の城
40代	本陣	施設非利用	2.5	図書館だった
50代	中村公園	施設非利用	1	丸い建物
80代	岩塚	施設非利用	3	配水塔

表-3 年齢層

年齢	20代以下	30代	40代	50代	60代以上	総計
施設非利用者	4	10	9	4	6	33
施設利用者	39	33	12	4	8	96
総計	43	43	21	8	14	129

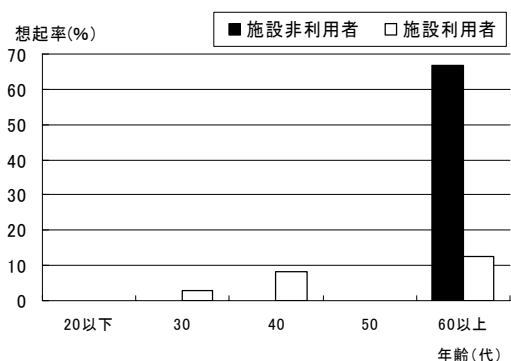


図-8 年齢層と「水道関連施設」の想起

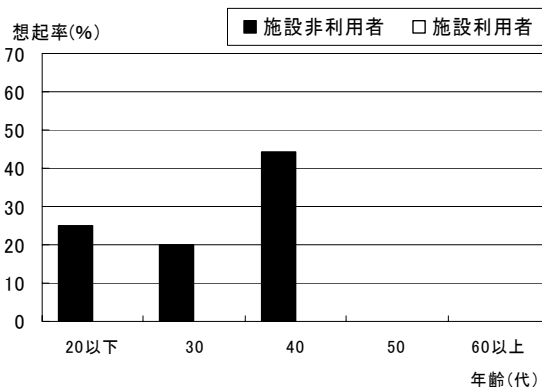


図-9 年齢層と「図書館」の想起

1996年には都市景観大賞（稲葉地公園地区），及び名古屋市都市景観賞（演劇練習館及び配水塔）を受賞するに至っている。

(2) 新聞、雑誌、書籍への掲載

旧配水塔は地元市民のみならず建築界でも注目されたが、掲載された新聞・雑誌・書籍の記録ならびに文献が現演劇練習館にて収集されている^{補注(4)}。その掲載数は演劇練習館に転用された後の1990年代後半（65件），ならびに2000年代前半（22件）に多く見られる（図-7）。前者は「名古屋文化情報」「名古屋流行発信」など地域誌が中心である一方、後者では「フロント」「建築知識」「茨城新聞」など全国誌あるいは地域外の新聞雑誌への掲載が目立っている。建築の再利用そのものが近年大きなトピックとして着目されているが^{補注(5)}，演劇練習館における記事数の近年の増加はこの動向に対応するものともいえよう。

4. 居住特性と想起イメージ

(1) 調査概要

以上のように、配水塔→図書館→演劇練習館 といった2度のリノベーションを経た現構造物に対する想起イメージについて、現地でのアンケート調査をもとに分析を行った。現演劇練習館に対するイメージ分析として、施設利用者ならびに施設非利用者^{補注(6)}についてアンケート調査を行った（表-1・2・3）。想起イメージは自由記述としたため多岐に渡る記述が得られ、後述のように用途名や様態などに着目し分類整理した。

(2) イメージ分析

a) 年齢層と水道関連施設・図書館の想起

「配水塔」「水道」「図書館」など、演劇練習館の旧用途である“水道関連施設”“図書館”に関する想起について分析した（図-8・9）。旧用途については

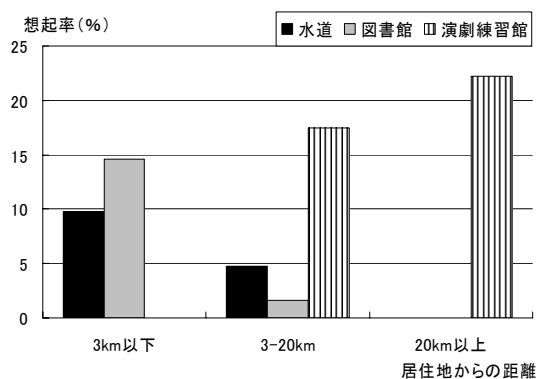


図-10 居住地からの距離と用途の想起率

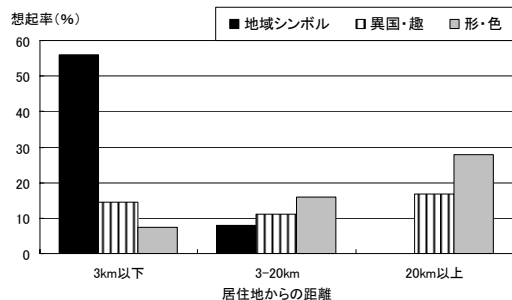


図-11 居住地からの距離とその他の言及内容

全体的に施設利用者の想起が低くなっていることがわかる。特に図書館の想起については、現用途（演劇練習館）を目的として来訪した施設利用者では皆無となっている。

“水道関連施設”の想起は施設非利用者の60代以上が67%を示しているのに対し、“図書館”の想起は40代以下の施設非利用者に見られる。実際、現在の施設内に配水塔時代の配水管が展示されているが、施設利用者にも1割以下であるが30～40代に配水塔の想起が見られる。

b) 居住地からの距離と用途の想起（図-10）

次に、居住地最寄駅データより、被験者の居住地から現地までの大よその距離^{補注(8)}を算出し、居住地からの距離と旧用途ならびに現用途の想起率との関連を分析した。旧用途では“図書館”は3km圏内で14%強となっているが、20km圏内で大幅に低下するのに対し、“水道関連施設”は20km圏内でも5%弱となっている。20km圏外での旧用途想起は図書館・水道ともに皆無となっている。

一方、現用途の想起率は逆に20km圏外で20%強、3-20km圏でも17%となっており、3km圏内では皆無となっている^{補注(9)}。近距離圏での経緯認識の高さに比べ、遠方からの訪問者は現用途を強く認識しているのがわかる。

c) 居住地からの距離とその他の言及内容（図-11）

「地域シンボル」「街のシンボル」など代表景としての認識が3km圏内で5割以上見られるが、3-20km圏内では10%以下に急減する。一方、「ギリシャ」「異国」「趣」というように、演劇練習館のもつ特有の雰囲気

言及したものが全ての距離圏において10～20%見られた。さらに、「円形」「白」など表面的な形態や色彩に言及したものが見られ、遠距離になるに従って増加しているのがわかる。

5. 結語

本研究では、名古屋市演劇練習館における想起イメージをアンケート調査によって調査分析し、居住特性とともにその実態を明らかにした。

居住地からの距離圏において、想起内容に相異が見られた。近傍の3km圏内においては地域シンボルとしての認識を伴っており、図書館・水道といった歴史的経緯も相対的に多く指摘されているのに対し、遠方の20km圏外においては逆に現用途の認識が卓越し、そのイメージも形態や色彩といった表層的なものとなる。さらに特徴的外観に文脈的関連をもたない異国情緒・異空間といったイメージが距離に関係なく想起されていることがわかった。歴史的経緯は施設非利用者において強く認識されることも指摘された。

このことは、土木のリノベーション空間の特質を議論する上で極めて示唆的な知見を提示していると考えられる。すなわち、地元に着目をもたれた構造物に対し、その近傍住民あるいは現用途を利用していない市民にとっては過去の歴史伝承という意味解釈が実現しているのに加え、構造物自体に地元ほどの愛着をもたない遠距離からの訪問者においては、所与の非・建築的機能（配水機能）から現出した特徴的形態（円柱形、色彩）に視線が注がれそこに能動的な意味解釈が行われやすいものと考えられる。ここでは、「配水」なる、いわば人間活動の展開を前提としないアンチ・ヒューマンな原理によって形成された土木景観（空間）が、ヒューマンな建築景観（空間）に転用され「見立て」られることによって新たな価値が生成しており、その引き出す風韻こそが土木リノベーション空間の大きな特長の1つであると捉えられよう。「演劇練習館」という新しい機能の付与が、遠方からの訪問者に上記のような新たな価値創造の機会を提供していることも注目に値する。

土木景観・空間におけるこのような潜在的性質については、所与の用途を喪失した土木遺産や産業遺産のもつ景観・空間的価値のポテンシャルとして位置づけることができる。今後さまざまな事例について調査検討を行い、構造物の形態特性や居住性、ロケーション、距離圏と価値創造との関係について明らかにする必要がある。

【参考文献】

- 1) 朝日新聞2004年6月8日号
- 2) 大江匡：創造行為としての保存・再生：建築設計

資料45保存再生, 建築資料研究社: pp. 95-97, 1994

3) 岡田昌彰: 「テクノスケープ・リノベーションに関する意味論的研究」: テクノスケープ 研究Vol. 69 No5, 2006

4) 樫野紀野ほか: 「住宅建築のリノベーション」鹿島出版会, 1998

5) 田原幸男: 「建築の保存デザイン」学芸出版社, 2003

6) フリックスタジオ (高木伸哉ほか): 「東京リノベーション」廣済堂出版, 2001

7) 家倉敬和・岡田昌彰: 「近代建築におけるリノベーション空間の特性に関する研究」日本都市計画学会関西支部講演集2, 2004

8) 岡田昌彰・岡島一郎: 金沢市末浄水場の空間構成とその利用に関する研究: 土木史研究論文集Vol. 23, 2004

9) 愛知県地域振興部地域政策課HP: <http://www.aichi-lrda.jp/php/resource1.php?keycode=R0060-01> (2007年7月現在)

10) 内閣府政府広報室HP: <http://www8.cao.go.jp/survey/s57/S57-08-57-08.html> (2007年7月現在)

【補注】

(1) 例えば建築においては, 改装費を含めても新築に比べ安価となるケースがある¹⁾.

(2) 工場などの空き家を芸術空間として活用する「アキヤート」をはじめ, 桁下や地下空間などにおいて芸術活動が展開されているが, 建築家大江匡は建築保存手法として(1)守る保存 及び(2)攻める保存 の2種を挙げ, 後者は内部プログラムの変更による「再生」手段と位置づけ, 2つの時感が互いの異質性を認めながら共生するところに価値創出の1つを指摘している²⁾.

(3) 水道施設の外観を敷地外の道路軸線に適合させ景観整備する手法は金沢市末浄水場にも見られる³⁾. 末浄水場設計者の石井一夫氏は名古屋市水道建設にも携わっ

ていたことがわかっているが, 両者の関連については今後の課題として挙げておきたい.

(4) ほぼ全ての掲載情報を網羅しているものと判断されたため, 統計的検討を行うこととした. 収集期間は1986年-2004年(本調査実施年)であり, 2004年11月現在99件の記事が収集されている.

(5) 家倉ら⁷⁾は, 1984年1月以降の朝日新聞記事における建築再利用関連記事数をカウントし, 1990年代に記事出現率が急増し2000年以降も漸増傾向にあることが指摘されている.

(6) 本稿で扱う施設非利用者とは, 調査日時において演劇練習場の利用以外の目的で現地(演劇練習場前の広場及び稲葉地公園)を訪れていたサンプルを示す.

(7) 施設利用者の旧用途に対する想起が少ない理由については, 施設利用者が歴史や系譜を理解せずあくまで“演劇練習場”としてのみ現施設を認識していることなどが推察される. 本研究においては実証には至らなかったが, 現状のさらなる実態調査を試みる必要がある.

(8) 本分析における距離算出は被験者の最寄駅から推定したものであるが, 市のターミナル駅である名古屋駅からの距離が約3kmであることや内閣府政府広報室の“大都市地域の住宅・地価に関する世論調査(1983年)¹⁰⁾における“中京圏”の定義が名古屋駅を中心とした半径30kmの円内地区であることなどを参照し, 長距離圏データのばらつきにも鑑み3km, 20km圏において分析を行うこととした.

(9) 3km圏内の施設利用者・施設非利用者の想起事象にはそれぞれシンボル, 図書館などが見られ, 現用途の言及は皆無であった.

地域資産としての名古屋市演劇練習館(旧稲葉地配水塔)に関する研究*

田中良英**・岡田昌彰***

本研究では, 配水塔という本来の用途から建築物(演劇練習館)に用途転用された代表的事例である名古屋市演劇練習館を対象とし, その転用の経緯の整理とともにアンケート調査によって景観・空間の評価現況を調査分析することで, 用途転用された土木空間の特性を把握した. 近傍の3km圏内においては地域シンボルとしての認識を伴い図書館・水道といった歴史的経緯も相対的に多く指摘されているのに対し, 遠方20km圏外においては現用途の認識が卓越し, そのイメージも形態や色彩といった表層的なものとなるのに加え, 特徴的外観に文脈的関連をもたない異国情緒・異空間といったイメージが距離に関係なく想起されていることがわかった.

Study on Old Inabachi Watertower in Nagoya as Regional Heritage *

By Yoshihide TANAKA**・Masaaki OKADA***

This study aimed to manifest the property of space of renovated civil engineering facility, taking old Inabachi Watertower in Nagoya as case study. We traced its history to be built and renovated from watertower to library and then exercise room for drama, and surveyed present evaluation of landscape and space by questionnaire. Visitors from within 3km tend to reflect the meaning as regional landmark and its history relatively with large percentage. On the other hand, visitors from out of 20km are inclined to recognize present use and superficial image such as form or color of the architecture.